

平成 22 年度 海外研修派遣 報告書

(財)癌研有明病院 放射線部核医学チーム 大澤 敦

私が Stanford 大学の研修に求めたことは、国内に限定した研究活動の場を、海外へ向ける足掛を作ることにあった。観光ではなく研修としての海外経験は、仕事に対する視野の広がりをもたらし、国内では当たり前と信じていたことに疑問符を投げかけることにもなった。

米国では、最先端の医療研究が潤沢な資金と人材で進められており、眩いばかりの成果をあげている。しかし、近年の膨大な医療費は、支払い能力を有する一部の者にしか、その恩恵を与えていない。医療保険に加入することさえ難しい現状を聞くにつれて、均一な医療サービスを保健適応で受けられる本邦は、国民として安心感があると自信を持って言えるようになった。

研修は放射線医学の着実な進化を体感する内容であり、Fred Chin, Ph.D. による Radiochemistry の講義は Radiotracer の開発が着実に進んでいること、それも能率的に行われていることを示唆していた。また、Andrew Quon, MD による ¹⁸F NaF & ¹⁸F FDG PET は、癌を専門とする施設の需要に応えていた。腫瘍の活動状態を DNA 合成から知るために、FLT PET を用いることは治療時期の最適化に貢献すると熱弁していた。

Michael Moseley, Ph.D. の講義で、興味深いものがあった。MR High Intensity Focused Ultrasound である。これは、MR guided US ablation とも言えるもので、現在のラジオ波焼灼術や放射線治療の一部と置換できる可能性を持っている。子宮筋腫の外来治療など、数年前に話題となった機器である。

放射線医学の進化で、今後のターニングポイントは Hyperpolarized ¹³C MR が PET を凌駕するかにある。次なる PET の手札は MR PET だが、その能力を生かせるのは Neurology という印象が強い。癌を対象にするなら MR PET で DWI を用いるかなど、現時点では予想できないが、来年には Stanford 大学で見通しが立つそうである。

この有益な研修を終えて、研究活動へのモチベーションが高まった。今後は海外を視野に入れながら研究活動を進める決心をした。



"ユーモラス溢れる講義をして頂いた Moseley 先生(右)と筆者"